

近代文語文の文体論的研究

著者	松崎 安子
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第329号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59405

まつ ざき やす こ 松 崎 安 子

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 329 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	近代文語文の文体論的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 小 林 隆 教 授 佐 藤 伸 宏 准教授 大 木 一 夫 准教授 甲 田 直 美

論 文 内 容 の 要 旨

第 I 部 総論

第 1 章 近代文語文の世界

明治期は、日本の言語生活史における一つの転換期であったと考えられ、それまでの日本人が経験していた状況と異なる言語環境が出来ていく。それはひとつに出版技術の向上が背景となる。書籍や新聞といった印刷物が多量に発行されることにより、一对多、または一对衆といった不特定多数の人々を読者として仮定した情報の伝達形態がなされるようになるが、それらの多くは文語文によって記されていた。

明治当初は新聞一紙、または書籍一冊が多人数の手に渡り読まれていたと考えられるが、明治半ばになると個人による書物の入手が困難ではなくなり、読者層が拡大する。これは、もはや書きことばが限られた階層によって独占されるような時代は過ぎ、庶民も普通に接することが可能になったことを表している。

わが国では幕末、開国当時、近代国家の証として国民に広く教育が行き渡ることを必要とした。明治 5 年に「学制」を頒布し、明治24年に至って初等教育への男女平均就学率が50%となる。その間、教育現場で使用されていた教科書は、文語文によるものが多いことから、明治期の初等教育における言語教育のあり方は、文語に関する教育にウエイトが置かれていたことがうかがえる。初等教育の現場で書記言語の学習において文語文が必須とされていたのは、一般社会の言語活動の多くが文語によるものであったからに他ならない。

ところが、従来の近代の文章・文体に関する研究を概観すると、文語文が研究対象として据えられる

ことは少なかった。しかし、文語文は現代の言語生活にまでも影響を及ぼしており、文章史研究において見逃すことはできない。近代文語文は、近代において隆盛を極めながら、口語文と使用の交代現象を演じ、やがて凋落も経験するといったように、近代の文章史において少なからぬ問題を呈している。筆者は、近代の文語文がそれ以前の文語文体と連続をなしつつ多様な要素を有し、その要素の性格に応じたかたちでさまざまに存在していたと考える。そして、口語文体の創出以前、または、口語文使用と同時並行的に多くの人々に書記文体として深く根ざしていた文語文の実態を知るということは、当時の言語生活の実態の一端を知ることにつながると思う。

第2章 先行研究と本研究の課題

近代文語文については、これまで次のような研究が行われてきた。

森岡健二は、文章が書かれる用途別に実用文系統、文学文系統と二つの系統に分けた上で、明治期における口語文と文語文のそれぞれの変遷を示した。だが、森岡は近代の文語文についてはそれぞれにいくつかの文章を例として挙げるのみで、文体を構成する諸要素などについては多くは触れておらず、近代文語文の内実をとらえきれているとはいえない。

近代文語文の文体の内実を知るには、様々な観点から文章を捉えなければならない。その中で、近代文語文の文体を構成する要素として、漢文訓読語彙の使用に着目したのが山田孝雄である。山田は、近代の実用的場面に用いられる文章が、漢文訓読語との関わりが強いと指摘し、近代に広く書かれる文章には中古文法そのままではないながら、漢文訓読に由来する語法が多く見られると述べ、それらを42項目に渡って掲げている。

それを受けて高野繁男は、近世の漢文法書から82パターンの漢文訓読の語法（副用言（副詞・連体詞・接続詞）・感動詞・これらの語と呼応する助動詞・助詞の用法と意味）を取り出した。そして、明治十年代の漢文訓読体はその82の言い回しのパターンで文章が構成されていると述べる。このような漢文訓読体は明治十年代末には和文や欧文脈、口語を混入させ、質の違ったものになり、明治普通文となったと結論付けた。

また、岡本勲は明治の新聞と教科書において見られる漢文訓読語を中心とした使用語の特徴から、共時的に「④基本的な普通文の文体。④の（一）漢文訓読語や庶民には難しい漢字漢語の多いもの。④の（二）漢文訓読語が僅少で、全般的に平易なもの。⑤通俗和文体⑥擬古文体」といったような文体が見られると指摘する。これらの④、⑤、⑥は文章の用途や内容、読者層によって使い分けられるとし、④は公的文章、学術的文章、論文、論説など筋立った硬い内容の文章に主として用いられ、⑤はどちらかというとやや知的水準の低い庶民向きで、通俗小説などに用いられ、⑥は主として文学詩歌など文芸的な世界の文章であると結論付けている。さらに進藤咲子によっても文中の使用語の性格による近代文語文の文体類型化の可能性が示唆されてきた。しかし、その作業はこれまで十分に行われてきたとはいえない。

以上のように、近代の文章史において文語文研究はそれほど活発には行われてきていない。そこで本研究においては、近代文語文の内部には文体類型があるのか。もしあるとすればどのような文体類型があるか。といった点について明らかにすることを目的とする。

近代文語文に関する先行研究においても、漢文訓読語の使用状態について触れており、近代文語文において使用される漢文訓読語の多少が文体の様相を明らかにするために欠かすことのできない要素であるように思われる。そのため筆者は、近代文語文に使用される漢文訓読語の多少によって近代文語文の内部に類型が見出せるのではないかと考えた。そこで、大坪併治、岡本勲、小林芳規、築島裕、山田孝

雄、吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸等によって漢文訓読語とされているもののうち、他の品詞に比べ文章の内容にそれほど左右されない品詞であり、文体の性質を掴むための指標になりやすい品詞と考えられる副詞・接続詞相当の漢文訓読語を指標とし、それらの使用の多少によって近代文語文の内部に文体類型を見出していこうと考える。

調査対象となる資料については、社会生活と密接に結びついているような実用的な場面で書かれた文語文（以下、「実用的な文語文」と呼ぶ）と、文芸作品として書かれた文語文（以下、「文学的な文語文」と呼ぶ）を扱う。実用的な文語文として小学校理科教科書、『(横浜) 毎日新聞』、総合雑誌『太陽』を対象とする。実用的な文語文資料としてこれらを対象とするのは、これらが近代に新しく登場し、多くの人々の言語生活に影響を及ぼしたと考えられる媒体であるためである。このような媒体における文語文の様相を知るとは、近代文語文の普通一般的な姿を明らかにすることにつながると思われる。また、文学的な文語文としては、政治小説、翻訳小説、少年文学にそれぞれ所属する作品を対象とする。文学的な文語文は、実用的な文章と比べ普及度は低いであろうが、各文学的ジャンルに対象となる読者が見える。また、芸術文としての工夫が文体類型に反映されていると考えられる。

このような資料を対象として、近代文語文における漢文訓読語の使用状況、使用傾向によって文体類型が見出されるのか、見出されるとすれば、それらがどのような文体類型の特徴をもつのかということ进行分类、検討する。その上で、それぞれの文体の性格や、その文体がこういった時に用いられやすいのかという点について、近代文語文を取り巻く文化的状況を背景として近代文語文内部にあると思われる類型の存在に対し意味づけを行う。

第Ⅱ部 漢文訓読的要素からみた近代の実用的文語文体の類型

第3章 教科書文体の類型

第3章においては、文語文によって書かれた近代の小学校理科教科書を対象とし、漢文訓読的要素の多寡によって文体进行分类した。

調査は以下13種の資料について行なった。①市川盛三郎訳『小学化学書巻一～三』（明治7年）、②松山棟菴・森下岩楠訳『初学人身窮理巻一、二』（明治9年）、③福井孝治著『下等小学養生談 巻一～三』（明治12年）、④中川謙二郎編『訓蒙化学 巻上・下』（明治13年）、⑤榎木寛則纂訳『小学生理篇 巻一～三』（明治15年）、⑥後藤牧太 他三名著『小学校生徒用物理書 上・中・下』（明治18年）、⑦小野太郎編述『小学理科書 巻二』（明治20年）、⑧学海指針社編『小学理科新書 巻二、三』（明治25年）、⑨文学社編『新定理科書 巻三』（明治26年）、⑩普及社編『小学理科 巻三、四』（明治27年）、⑪棚橋源太郎・樋口勘次郎合著『小学理科教科書 巻四』（明治33年）、⑫文部省編『尋常小学理科書 第五、六学年用 第一期国定』（明治43年）、⑬文部省編『尋常小学理科書 第五、六学年用 第二期国定』（大正8年）

上記の資料において漢文訓読的要素の使用状況を見てゆくと、資料によって使用の多少が見られた。対象資料における漢文訓読的要素の使用数について、同じような偏りが見られる語をひとまとまりの語群とし、その使用状況に応じて文体が分類された。漢文訓読的性格を有する語形式のあらわれる資料がもっとも限定されている語群をA、すべての資料にあらわれる語群をDとする。また、その中間である語群をB、語群をCとすると表1のようになる。表中の記号「◎」は分類した各文体に非常に特徴的に見られる語群であり、一方、「△」で示す語群は、その文体類型にはほぼ見られないものであり、「△」よりも多くの使用がみられる場合は「○」とした。

表1 小学校理科教科書の文体と類型化の指標となった語群との関係

資料と発行 年	①～⑤ 明治7～15	⑥⑧⑩ 明治18～27	⑦⑨⑪ 明治20～33	⑫⑬ 明治43、大正8
A	◎	△	△	△
B	◎	◎	○	△
C	◎	◎	◎	△
D	◎	◎	◎	◎
類型	I	II	III	IV
漢文訓読的要素の多少	多 ←————→ 少			

①～⑤の資料はAからDまでの語群の使用が見られる。これを類型Iと呼ぶことにする。

資料⑥⑧⑩はB～Dの語群の使用が見られ、これを類型II、資料⑦⑨⑪はCDの語群の使用が見られ、これを類型III、資料⑫⑬はDの語群の使用が見られ、これを類型IVと呼ぶ。

以上のように、近代の教科書の文体は、漢文訓読的な性格が非常に強い副詞・接続形式を使用するIのような類型から、漢文訓読的性格の非常に弱い副詞・接続形式を使用するIVのような類型まで四つの類型が認められる。この四つの文体類型の存在は、多変量解析によっても検証された。各類型の特徴は以下ようになる。

【各文体類型の特徴】

類型I…語群A～Dが全て出現する。アタカモ、アニ、イズクンゾなどの漢文訓読的性格の強い副詞、接続形式が多用される文体。

類型II…語群B～Dが出現する。シカレドモ、スコブル、ハナハダといった漢文訓読的性格の強い副詞、接続形式が比較的多く使用される文体。

類型III…語群C、Dが出現する。アルイハ、カツ、コトゴトクといった漢文訓読的性格を有する副詞、接続形式は使用されているが、ごく少ない文体。

類型IV…ほぼ語群Dのみが出現する。漢文訓読的性格を有する副詞、接続形式がほとんど使用されない文体。

類型	I	II	III	IV
資料番号	①②③④⑤	⑥⑧⑩	⑦⑨⑪	⑫⑬
発行年	M7-15	M18-27	M20-33	M43.T8
漢文訓読的要素の多少	多 ←————→ 少			

図1

文体類型、資料番号、漢文訓読的要素の多少についての関係は図1のようになる。

本調査で、漢文訓読的性格を有する語形式は、資料の刊行年の古いものにより顕著に表われ、それとは逆に資料刊行年の新しいものにはほとんど見られなかった。そのことによって資料の旧新がそのまま文体類型IからIVに相当するかのようと思われる。しかしながら、資料⑥～⑪は刊行年に関わらずそれぞれ類型IIとIIIに分類された。このことは、明治期においてII、IIIのタイプが並存していた時期もあったことを示している。

第4章では『横浜毎日新聞』明治8年（2月1日から一週間分）、『毎日新聞』明治20、32、39年（それぞれ2月1日から一週間分）の記事文について第3章で用いたのと同じ漢文訓読の性格を有する語を指標とし、文体を分類し、文体類型のあり方について考察した。

表2 教科書文体の類型と新聞記事文体の類型との関係

類型		I	II	III	IV
語群 A		◎	△	△	△
語群 B		◎	◎	○	△
語群 C		◎	◎	◎	△
語群 D		◎	◎	◎	◎
小学校理科教科書	資料番号	①～⑤	⑥⑧⑩	⑦⑨⑪	⑫⑬
	発行年	明治7～15年	明治18～27年	明治20～33年	明治43年、大正8年
新聞記事	発行年と記事名	明治8年…論説、海外雑聞、江湖雑聞・本県雑聞 明治20年…論説、海外雑聞、雑報、寄書 明治32年…論説、寄書、乗合船、芸能・娯楽 明治39年…論説	明治20年…商況 明治32年…雑報、商況、人物伝 明治39年…海外雑聞、雑報、商況、芸能・娯楽	明治39年…人物伝	明治32年…海外雑聞、正誤、時事雑感 明治39年…家庭
	分類記号	a	β		
漢文訓読の要素の多少		多 ←—————→ 少			

その結果、新聞記事の文章の類型は A ～ D 全ての語群の使用がみられる記事類 (α) と、語群 A の使用が語群 B の使用の約三分の一と極端に少ない新聞記事類 (β) の二つに大きく分けられた。記事類 α は、全ての語群にわたって使用がみられるため第 3 章の教科書文の分析で得られた類型 I の文体であるといえる。また記事類 β は、教科書文の分析で得られた II 類の文体であると考えられた。教科書資料の文体を分類した語群と文体類型の関係を示した表中に位置付けると次の表 2 のようになる。この分類は多変量解析による検証でもほぼ妥当なものであることが確かめられた。

類型Ⅰには、明治期前半に発行された新聞の記事が主に分類されたが、論説記事については発行年の新旧に関わらずⅠ類に分類された。類型Ⅱには主に明治期後半の商況、雑報の記事が分類された。これらは明治期前半にはⅠ類の類型で書かれていたものであるが、年を降る毎に文体が変わってきていることを示している。また、新聞記事の文体類型はほぼⅠ、Ⅱに限られる。これは小学校教科書がそれを使用する低年齢層に配慮し、時代を経るに従い漢文訓読的な性格を有する語の使用を控えていったのと異なり、新聞を読む成人層に対しては少々多めに漢文訓読的な性格を有する語を使用しても理解可能であると執筆者が判断していたことの現れであると考えられる。

第5章 雑誌『太陽』における文語文記事の文体類型

第5章では、総合雑誌『太陽』の明治28年、明治34年、明治42年、大正6年、大正14年の各年第1号を対象とし、第3、4章で用いたのと同様の漢文訓読的性格を有する語を指標とし、文体を分類し、その文体類型のあり方について考察した。雑誌『太陽』では、語群A～Dに一定量の漢文訓読的性格を有する語形式の使用が見られる記事、語群Aが少なく、語群Bが多い記事文、語群A、Bの使用数が少なく語群Cの使用がある程度用いられている記事がありそれらはそれぞれ、教科書の調査で得られた四つの類型のうち類型Ⅰ～Ⅲに相当すると考えられる。

『太陽』記事の発行年と記事内容及び、文体類型とは次のような関わりが読み取れた。

- ① Ⅰ類に分類された記事文は『太陽』の中でも比較的発行年の早い明治28年、34年掲載の記事に多い（明治28年「地理、政治、雑録、論説」、34年「論説、農業世界、経済時評、教育時評」）。
- ② 内容の性質が同じと考えられる記事で、年を降るにつれ文体類型が変わっているものが見られる。例えば、明治28年「政治」→34年「政治時評」や、明治28年、34年「論説」→42年「論説」のような記事である。これらの記事文体は類型Ⅰから類型Ⅱへと推移している。これは、記事文体が漢文訓読的性格の強い語形式をよく使用する類型から、いくぶん減少させる方向へ向かっていることを表しており、記事文が平易化していると考えられる。
- ③ 発行年が早いものでも明治28年「家庭、文学」、明治34年「社会事情」のような記事はⅢ類へ分類された。これらは新しい事実・ニュースを伝えるというより、執筆者個人の感想であったり、随筆のような性質を持った記事は、発行年が早くともⅠの類型を採りにくい。

表3 雑誌『太陽』の記事と文体類型の関係

文 体 類 型				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
『太陽』 発行年と記事	明治28年…地理、政治、 雑録、論説、海外彙報、	明治28年…史伝、芸苑、美術、社会、 農業、工業、**、商業、科学、法律	明治28年…家庭、文学	
	明治34年…論説、農業世 界、経済時評、教育時評	明治34年…歴史地理、家庭談叢、文芸 時評、工業世界、商業世界、政治時評、 海外事情、政治時評、科学世界、人物 月旦、宗教時評、法律時評、太陽	明治34年…社会事情	
		明治42年…雑纂、論説、時事評論、学 芸		
	大正6年…**	大正6年…政治経済時論		

第Ⅲ部 漢文訓読的要素からみた近代の文学的文語文体の類型

第6章 政治小説の文体類型

第6章では、文学的場面で書かれた文語文として政治小説（20作品）を取り上げ、第Ⅰ部第2章と同様に、先行研究によって漢文訓読語とされているもののうち、副詞・接続詞相当の漢文訓読語について使用数をみた。対象とした作品は以下のとおりである。なお、（ ）内は作品の発行年（明治）を示す。

- ①菊亭香水『惨風悲雨 世路日記』上～下編（15）、②丹羽純一郎訳『花柳春話』第一編（11）、③東海散士『東洋之佳人』（21）、④高須治助訳『露国奇聞 花心蝶思録』（16）、⑤服部撫松訳『泰西活劇 春窓綺話』第一～五回（17）、⑥尾崎行雄『新日本』第一～十章（19）、⑦東海散士『佳人之奇遇』一編卷一～三（18）、⑧戸田欽堂『民権演義 情海波瀾』（13）、⑨矢野龍溪『報知異聞 浮城物語』第一～二

十回 (23)、⑩矢野龍溪『齊武名士 経国美談』第一～十回 (16)、⑪矢野龍溪『新社會』第一～十回 (35)、⑫関直彦訳『政党余談 春鶯囀』第一編 (17)、⑬宮崎夢柳『芒の一と叢』(21)、⑭宮崎夢柳訳『虚無党実伝記 鬼啾啾』(17)、⑮原抱一庵『闇中政治家』第一～十回 (24)、⑯坂崎紫瀾『天下無双入傑海南第一伝奇 汗血千里駒』第一～廿二回 (16)、⑰武田交来『冠松真土夜暴動』(13)、⑱宮崎夢柳訳『仏蘭西革命記 自由の凱歌』第一～五十五回 (15)、⑲宇田川文海『勤王佐幕 巷説二葉松』(16)、⑳桜田百衛『仏国革命起源 西の洋血潮の暴風』(15)

全20作品について漢文訓読的な要素の多い順に各資料に対し①～⑳までの番号を付した。資料①～⑳に使用される漢文訓読的性格を有する語には、いくつかの資料に偏って使用されているものがあり、それらの偏りが似ている語群があった。出現傾向が似ている語を指標とし、文体の類似する資料をまとめた。

その結果、文語文による政治小説の文体は全体で四つの異なった文体類型を有していた。これを先に見た実用的な文語文の文体類型と比較したところ、各文体類型は表4のような重なりをみせた。政治小説の類型Ⅰ～Ⅲは、実用的な文語文の類型Ⅰ～Ⅲと重なる文体類型である。さらに、作品の文体類型と発表年の関係に着目する(図2)と、政治小説の文体類型がⅠからⅢへ推移させる時期と、実用的な文語文としての小学校理科教科書の文体類型Ⅰが明治初期～半ば、Ⅱが明治半ば、Ⅲが明治半ば～後期へ推移する様子とがほぼ重なる。

一方、実用的な文章の文体タイプのいずれとも重ならなかった類型Ⅴに分類された資料⑬⑭は『自由新聞』、⑮は『大阪朝日新聞』といったように新聞紙上に発表されている。このことから、類型Ⅴは当初から単行本を手にする読者層より多くの読者を獲得することを意識して書かれた漢文訓読的性格の弱い文体であり、より大衆性を帯びた媒体に登場しやすい文体であると考えられた。

表4 実用的な文語文と政治小説の文体類型の関係

政治小説語群	政治小説資料番号					実用文体での語群名
	①～⑧	⑨～⑪	⑫～⑯	⑰～⑳		
A'	◎	○	○	△	A	
B'	◎	◎	○	△	B	
C'	◎	◎	◎	◎	C	
	◎	◎	◎	◎	D	
	△	○	◎	◎	×	
政治小説の文体類型	I	II	III	V		
実用文の文体類型	I	II	III	×		

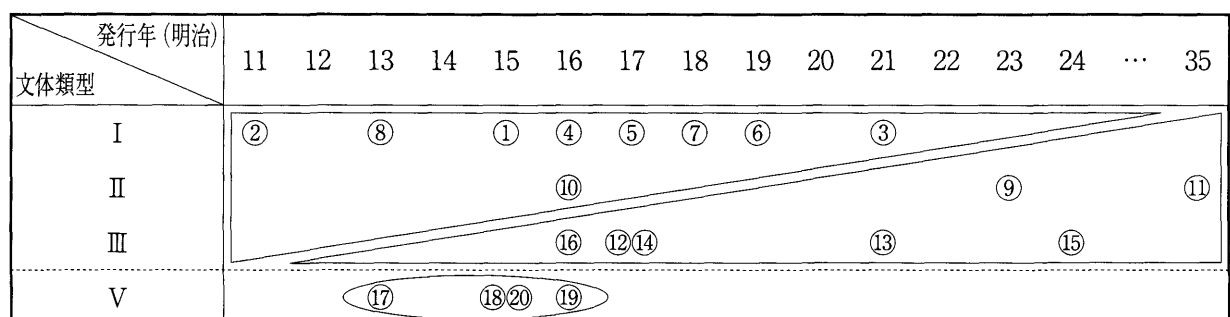


図2 文体類型と政治小説資料発行年の関係

第7章 翻訳小説の文体類型

第7章では、明治期の文語文によって書かれた翻訳文学作品を対象とし、漢文訓読語の使用の多寡といった観点から文体のタイプを分類した。調査では地の文、会話文ともに文語文によって翻訳された次の14作品を対象とした。() 内には発行年(明治)、[] 内には作品の内容ジャンルを示す。①丹羽純一郎『欧州奇事 花柳春話』第一篇(11)[政治、情史]、②高須治助『露国奇聞 花心蝶思録』(16)[政治、情史]、③服部撫松『泰西活劇 春窓綺話』第一～五回(13)[政治]、④川島忠之助『新説 八十日間世界一周』第一～九回(11)[冒険]、⑤森田思軒『探偵ユーベル』(22)[政治、スパイ]、⑥竹内余所次郎『一名 西洋歌舞伎種本』(19)[戯曲]、⑦井上勤『開卷驚奇 龍動鬼談』(13)[探偵]、⑧永峯秀樹『開卷驚奇 暴夜物語』巻之一、二(8)[説話]、⑨井上勤『独逸奇書 狐の裁判』第一～三回(17)[古譚、風刺]、⑩宮崎夢聊『虚無党實傳記 鬼啾啾』第一～六回(15)[政治]、⑪井上勤『人肉質人裁判』(16)[戯曲]、⑫神田孝平『和蘭美政録』(10)[探偵]、⑬宮島春松『欧州小説 哲烈禍福譚』巻之一～四(12)[冒険]、⑭桜田百衛『佛國革命起源 西の洋血潮の暴風』(15)[政治]

調査語については第6章と同様に漢文訓読的性格を有する語を指標とした。全14作品について漢文訓読的な要素の多い順に①～⑭の番号を付した。①～⑭に使用される漢文訓読的性格を有する語には、いくつかの資料に偏って使用されているものがあり、それらの偏りが似ている語群があった。出現傾向が似ている語を指標とし、文体の類似する資料をまとめたところ、翻訳文の文体は五つの類型に分類された。多変量解析法を用いた検証によってもこの分類はほぼ妥当なものとされた。この結果を実用的な文語文の文体類型と比較すると、表5のようになる。実用的な文語文の調査において類型Ⅰとされたところが、翻訳文では語群 α が特徴的に使用されるⅠ-1と、語群 α 、 β が特徴的に使用されるⅠ-2に分けられた。翻訳文の類型Ⅱ、Ⅲは実用的な文語文の類型Ⅱ、Ⅲとそれぞれ重なる文体類型であることが、例文の比較により確かめられた。

また、翻訳小説の文章では作品の素材および主題に対して、ある程度志向される文体があったものと考えられる。漢文訓読的な性格が強く硬い文体である類型Ⅰ-1には資料①～③のような政治小説が分類されている。類型Ⅰよりも漢文訓読的な要素が少なめで、いくぶん軟らかい文体となっている類型Ⅱ、Ⅲには娯楽的性格を有するテーマを取り扱う作品が分類されている。漢文訓読的な性格の強い文体ほど作品のテーマも堅く、漢文訓読的な性格が弱い文体ほどテーマも柔らかい作品が分類されるという傾向がみられた。また、本調査では井上勤の翻訳による作品(⑦⑨⑪)の文体がいずれも類型Ⅱに分類された。これは同じ翻訳者による文章であるために、同じ類型になりやすかったためと考えられる。

さらに、実用的な文語文の類型と重なりを見せない資料⑬⑭のような文体類型Ⅴが分類された。翻訳

表5 翻訳文体の文体類型と語群の関係(実用文との比較を交えて)

	語群	資料番号						
		①～③	④～⑥	⑦～⑪	⑫	⑬・⑭		
翻訳文の文体分類のための語群	α	◎	○	○	○	○	A	実用文の語群名で
	β	◎	◎	○	△	○	B	
	γ	◎	◎	◎	×	○	C	
	δ	◎	◎	◎	◎	○		
	ε	◎	◎	◎	◎	◎	×	
翻訳文の文体類型		Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ		
実用文の文体類型		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ			

文Vは漢文訓読的ではない、強いて言えば和文的な性格の語を用い、独特の装飾的要素の強い文体を形成している。

第8章 明治期の文語文による少年文学の文体類型

第8章では、明治期に文語文で書かれた少年文学作品12作品を対象とし、漢文訓読語の使用状態（多寡）から文体類型を見出し、その性格を明らかにした。対象とした作品は以下のとおりである。（ ）内は発行年（明治）、〔 〕内には作品の内容を示す。①森田思軒訳『十五少年』（29）〔冒険〕、②幸田露伴『伊能忠敬』（32）〔史伝〕、③川島忠之助訳『八十日間世界一周』（11）〔冒険〕、④石井研堂『中浜万次郎』（33）〔史伝〕、⑤幸田露伴『二宮尊徳』（24）〔伝記〕、⑥石井研堂『鯨幾太郎』（26）〔冒険〕、⑦漣山人『こがね丸』（24）〔童話〕、⑧石井研堂『少年魯敏遜』（33）〔冒険〕、⑨江見水蔭『加藤清正』（27）〔史伝〕、⑩幸田露伴『弓太郎』（28）〔少年〕、⑪川上眉山『寶の山』（24）〔童話〕、⑫江見水蔭『今弁慶』（24）〔少年〕。調査語については第6、7章と同様、漢文訓読的性格を有する語を指標とし、それらの使用の多いものから順に資料に対して①から⑫の番号を付した。漢文訓読的性格を有する語には、12の資料においていくつかの資料に偏って使用されているものがあり、それらの偏りが似ている語群がある。そのように出現傾向が似ている語を指標とし、文体の類似する資料をまとめた。

その結果、少年文学作品の文体は資料①～③、④～⑥、⑦～⑨、⑩～⑫のように四つの類型に分けられる。それぞれの語群が分類する文体に対し i ～ iv といった類型名を与える。それらの関係は表6のようにまとまる。このうち i ～ iii は実用的な文語文の文章にも見られた文体と共通した。少年文学の文体類型 i ～ iii は、実用的な文語文の類型 I ～ III にほぼ対応する文体である。また成年層を读者に持つ政治小説が類型 I から出発したのに対し、少年文学はその発生から類型 II や III といった漢文訓読的な要素が低い文体によって書かれたことが分かった。

表6 少年小説の文体類型と語群の関係

語群 \ 類型	i	ii	iii	iv
a	◎	△	△	△
b	◎	◎	○	△
c	◎	◎	◎	△
d	◎	◎	◎	◎

また、少年文学の最も漢文訓読的性格が弱い文体類型は、実用的な文語文の文体類型のいずれとも重ならない文体類型であった。この文体の特徴は、和文的な要素により独特の装飾性が加味された文体であるということである。この文体は政治小説や翻訳小説にも見られていることから、文学的な文語文に特徴的な文体類型であると言える。

さらに、実用的な文語文の文体類型のあり方に関わる事情とは異なる点として、時代的な制約のほか、書き手個人の事情が関係し、書き手個人が有する、または好む文語文体の類型というものがあると考えられた。

第9章 文学的な文語文における漢文訓読的要素と和文的要素

実用的な文語文には見られず、文学的な文語文に見られた文体類型 V の特徴として、和文的要素が挙げられたことから、文学的な文語文については漢文訓読的性格を有する語の他に、和文的要素から文体を分類することの可能性が考えられた。そこで第9章では、近代の文学的な文語文について、漢文訓読的・和文的要素の両側面から文体の様相を捉えた。

調査にあたっては、明治年間に文語文によって著された24の文芸作品を調査対象とした。対象資料に

において、築島裕が挙げる、「ゴトシーやうなり」、「シムーす・さす（使役）」のような意味的に対応関係にある漢文訓読語と和文語を指標とした。そして、作品ごとの漢文訓読系・和文系語彙の使用割合のうち、漢文訓読系語彙の使用割合を基に作品の文体の類似度を示したのが、図3である。図3では、各作品の文体が漢文訓読系語彙の使用割合においていくつかのまとまりを見せている。即ち、漢文訓読系語彙の使用割合が7.5割を超える一群、5割～7割強の一群、5割未満～2.5割の一群、2.5割未満の一群という四つのまとまりである。これらを類似した文体類型として捉え仮に漢Ⅰ、漢Ⅱ、和Ⅱ、和Ⅰと命名した。

漢Ⅰには翻訳文学、漢Ⅱに政治小説、歴史文学、開化期文学、和Ⅱに硯友社文学、和Ⅰに女流文学の作品が所属する傾向にあることから、作品の素材と文体の間には相関的な関係が存在していたと考えられる。

このことは同時に、漢と和の各類型に属す作品の受容者層のありさまも浮かび上がらせているように思われる。例えば、政治小説や翻訳小説といった漢文訓読的文体としての性格が濃厚な作品は教養層、主に男性のための文学であったと考えられる。当時の言語教育課程で漢語・漢文に触れることが多かった人々の言語生活のうち、とくに書く・読むといった行為の中心は、たとえ娯楽としての要素を含んだ小説という媒体の文体であっても、硬質な漢文訓読的な文体を要求していたと考えられる。また、和文系に属す女流文学は書き手が女性であるとともに、読み手も女性であることを意識して書かれたものであろう。女性は男性の言語教育の中心が漢語・漢文であったのと対照的に和文（仮名文）を修めることが中心的であり、女性の書記言語に求められていたのは、優美で軟らかい文体であった。こういった性差や教育機会の異なりによっても類型の存在が支えられていたと考えられる。

第Ⅳ部 近代文語文の文体類型の位置づけ

第10章 近代文語文における文体類型の広がり

第1、2節では、近代文語文によって書かれた実用的・文学的な文語文について第3章から第9章で行なった調査のまとめを行なった。

第3節では、各調査において文体類型を特徴付けた語群にはどのような語が所属し、それらがどの程度文体類型を決定づける文体指標となり得ていたのかについて検討した。

各調査においてある文体類型を決定付けた語群に所属する語は、いわば家族的類似性をもって語群を形成する。そのなかには、数は必ずしも多くはないながら、実用的な文語文と文学的な文語文について典型的・共通的に類型ⅠからⅢの文体をある程度分類することが可能な語がある。また、語群AからDは漢文訓読語として等質な価値・性格を有しているわけではない。語群Aに見られた「イハク、イ

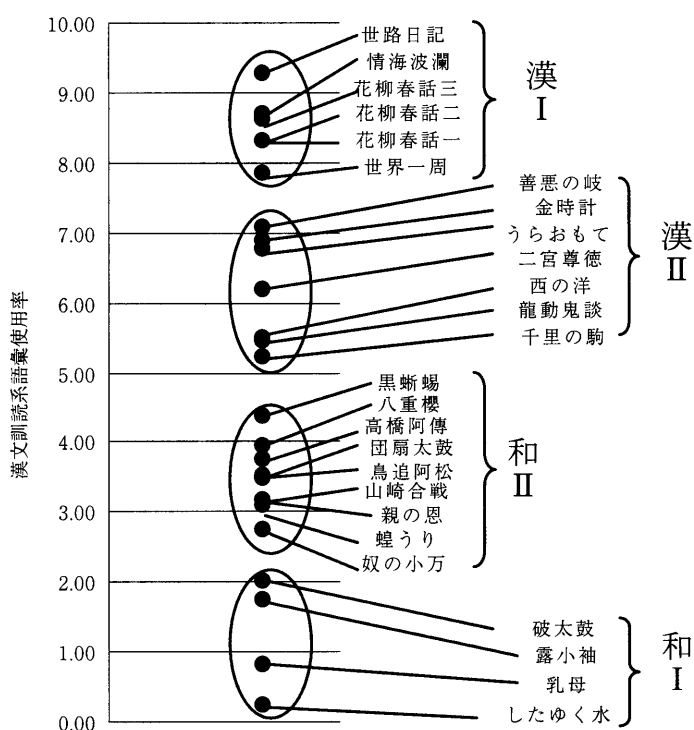


図3 漢文訓読系語彙の使用率からみた作品文体の類似度

ヘラク、オソラク、ケダシ、アニ、ナンスレゾ」といった語は、中田祝夫に従えば、平安時代当時からみても前代に使用されていた語であり、一種の古めかしさを伴った語である。このような語は、訓読文に対し荘重的な性格を付与するための装飾的な性格を持つ語であり、漢文の書き下し文であるとか復文が可能などの文体であることを演出する語であると考えられる。また、語群Dに所属する語には、現代において文章を綴る際によく使用する語が多く含まれる。

第V部 結論

第11章 まとめにかえて

本論では、近代文語文について実用・文学という系統を超え類型Ⅰ～Ⅲの三つの類型が共通する文体として見出されたが、これらの文体類型の存在は当時の文語文を取り巻く文化的な背景と文語文を書記言語として書き表す人々、享受する人々の言語能力の養成課程によって支えられていた。

近代において公にされる文章の基盤は、漢学塾における素読によって養成された等質な文章感覚にあった。その文章感覚は、学習者の書く文章へも反映され、類型Ⅰのような文体となって表された。だが、多くの漢字、語彙を習得するためには時間や労力、費用がかかり、そういった教育を国民の誰しもが享受できるわけではなかった。それゆえに、漢文訓読語を多く使用する類型Ⅰのような文体には権威的なイメージが付きまとっていた。

出版技術が向上し、出版物の流通が盛んになると、庶民自らが、日常生活を営む上で読み書きの能力を身につけることの重要性を知っていった。さらに、教育機会が拡大すると特権的な位置にあった文体は長くは続かない。学制が敷かれ、平均化した教育機会の中で学習者が触れる文語文の文体は、漢文訓読的な要素を減少させた文体へと推移させていく。

近代文語文は、書かれる文章の内容、目的別に類型の存在がある程度保たれていたが、漢文訓読的な要素を減少させた近代文語文は、書記言語として規範的な位置にまで統一することはなく衰退、消滅の道を辿った。しかし、漢文訓読的な要素を減少させたことによって多くの人々が書き、読むことができるようになったという点において、近代文語文として発展し得た。近代文語文において実用・文学といった系統を越えて存在する文体類型ⅡやⅢといった文体類型は、漢文訓読的な要素を減らすことによって明治庶民の文体となり、明治期に生きる人々の日常普通に使用される文体となったということではなかろうか。

一方、実用的文語文と文学的な文語文で共通しない文体類型があった。実用的な文語文における類型Ⅳは、漢文訓読的性格を有する語の使用が少なく、バリエーションも極端に制限された文体で、シンプルかつ単調な説明文となった。近代文語文においては規範となる文体は完成しなかったものの、その最終形態がⅣというきわめてシンプルな文体になったと考えられる。文学的な近代文語文においては、和文的要素や雅文的要素が特徴的な文体類型Ⅴが見られた。文学的な文語文における類型Ⅴは、和文語が効果的に使用されており、結果的に装飾性が感じられる文章となっている。類型Ⅴのような文体を記す作家には、書記言語の能力として類型Ⅰ～Ⅳが備わっていたはずである。だが、あえて実用的な文語文にはない耽美的伝統趣味を特徴とした文体を作り上げることで小説という文学ジャンルの意義を明らかにし、その社会的地位の向上を図ろうとしたとも考えられる。

論文審査結果の要旨

本論文は、近代日本語における文語文について、文体類型を見出し、その性格を明らかにしようとしたものである。全体は5部11章からなる。

第Ⅰ部「総論」では、近代文語文がおかれた状況を出版文化および近代教育の側面から描き出し（第1章）、そのうえで、近代文語文の研究の現状を示し、本論文の目的と方法を述べる（第2章）。

第Ⅱ部「漢文訓読的要素からみた近代の実用的文語文体の類型」では、実用的な文章として、小学校理科教科書（第3章）・新聞（毎日新聞）（第4章）・雑誌『太陽』（第5章）の文語文をとりあげ、それらがいかなる文体類型をもつのかを検討している。文体類型を見いだす指標として漢文訓読語を用いて計量的に分析することで、これらの文語文に4種類の文体類型があることを見いだした。また、これらの4種の文体類型の史的変遷についても明らかにしている。

第Ⅲ部「漢文訓読的要素からみた近代の文学的文語文体の類型」では、文学的な文語文として、政治小説（第6章）・翻訳小説（第7章）・少年文学小説（第8章）の文語文をとりあげ、漢文訓読語を指標として文体類型について検討している。文学的な文語文には、実用的文語文と共通の文体類型が3種、異なる類型が1種あると考えた。さらに、漢文訓読語の対概念である和文語を指標として文学的文語文の文体類型を見いだすことも試みている（第9章）。

第Ⅳ部は「近代文語文の文体類型の位置づけ」として、これまでに見いだされた近代文語文の文体類型の性格をあらためて考え、それらの文体類型の意味するところを考察し、また、どのように位置づけられるのかを検討している。同時に、これまで指標となってきた漢文訓読語の指標語としての性格を論じている（第10章）。

第Ⅴ部「結論」は、本論文で見いだされた文体の文化的背景についてさらに論じ、今後の課題についてまとめている（第11章）。

従来の近代日本語の文章研究は、言文一致にいたるまでの口語文研究が中心であり、近代の文章の相当部分を占める文語文については、ほとんど検討がなされてこなかった。そのようななかで、本論文は、近代文語文を対象として、漢文訓読語を指標とすることによって、教科書・新聞・雑誌の実用的文語文、および政治小説・翻訳小説などの文学的文語文にみられる文体類型を見出し、それらの文体的な性格を論じ、また時代的変遷を明らかにした。この成果は、近代日本語の文体論研究・文章史研究に大きく寄与するものといえる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。